

メディアとスポーツジャーナリズムの関係

Relationship between Media and Sports Journalism

1J00C091-6

氏名 小泉 智

指導教員 主査 太田章 先生

副査 リー・トンプソン 先生

[はじめに]

現在のスポーツジャーナリズム界には批評精神が足りないとの思いがこの論文を書く動機となった。2006 年 8 月 2 日のボクシング WBA 世界ライトフライ級タイトルマッチ、亀田興毅対ファン・ランダエタ戦のテレビ中継の放送内容、また翌日の新聞各紙の報道などにスポーツジャーナリズムにおける批判性の欠如を強く感じた。スポーツを消費しつつ、「ただ、楽しければいい」というメディアの風潮へ疑問を投げかけ、また、批評性を植えつけるためにはどうしたらよいかを検証するのが本研究の目的である。

[第 1 章 ジャーナリズムの役割・目的]

本章ではジャーナリズムの役割として、報道活動と批評活動の 2 つがあることを述べた。また、ジャーナリズムの目的として「ジャーナリズムは社会のために存在する」と述べた。そして、ジャーナリズムはどうあるべきかを論じ、「真実の探求と報告・発表を行う」ことと、「ジャーナリズムの独立性を守る」ことを提言した。

[第 2 章 メディアとスポーツの関係]

本章では各メディアの歴史と、各メディアとスポーツの関係の歴史を示した。本文で述べたメディアは（1）新聞（2）雑誌（3）ラジオ（4）テレビである。特に新聞では批判性が著しく欠如しているスポーツ新聞の特徴を比較した。また、テレビでは普及の過程や現在のスポーツ番組について述べた。本章の最後にメディアの進化によって、大衆に好まれるスポーツの変化についても述べた。

[第 3 章 メディア比較]

本章ではまず（1）日本人のメディア接触状況、（2）年代別インターネット利用状況、（3）インターネット普及率をグラフで図示した。次に、各メディアの特徴を比較した。比較方法は活字メディア、放送メディア、電子メディアの 3 種類にメディアを分類しそれぞれの長所・短所を（1）速報性、（2）迫真性、（3）受動か能動か、（4）詳細性、（5）論理性、の 5 項目で比較した。各メディアの特徴を理解し効率的なジャーナリズム活動を行うことが重要だと述べた。

[第 4 章 スポーツジャーナリズム界の問題点]

本章ではまず、メディアとスポーツの関係における問題点として、（1）スポーツイベントを主催するメディアの是非、（2）スポーツ中継に演出は必要か、（3）雑誌『Number』の功罪について言及した。次に、メディアとアスリートの関係における問題点を明確にするために、取材を受けるアスリートの立場から太田章先生と記者の立場からスポーツニッポンの小川裕之氏にインタビューを行った。その結果、アスリート側からは記者の勉強不足や娯楽嗜好への不満、記者からはアスリートと仲良くなれば取材ができないこと、また、フリージャーナリストが取材しづらい状況にあることなどの問題点が明確になった。そして最後に、メディアと大衆の関係における問題点として、メディアリテラシーとユニバーサルアクセス権について言及した。結果として、（1）メディアがスポーツイベントを主催していること、（2）スポーツ報道がエンターテインメント化していること、（3）選手と記者の距離が近く批判が困難であること、（4）フリージャーナリストが取材しづらいこと、（5）大衆のスポーツ及びジャーナリズムへの理解が十分ではないこと、という 5 つの問題点が明確になった。

[第 5 章 スポーツジャーナリズムに批評精神を植えつけるための提案]

本章では前章での 5 つの問題点を解決するために、以下の 3 つの提案を行った。（1）スポーツジャーナリズム教育の実施、（2）スポーツイベント運営団体の設立、（3）フリースポーツジャーナリスト協会の設立、である。以上の 3 点を現在のスポーツジャーナリズム界における批評精神の欠如を改善する提言とした。

[最後に]

スポーツ界の発展が日本人の生活を豊かにすること、そのためにはスポーツジャーナリズム界が批評活動を健全に行っていくことが必要であると述べた。